

スラバヤ日本人学校におけるインドネシア語会話、 英会話の授業を生かした実践

前スラバヤ日本人学校 教諭

福島県いわき市立永崎小学校 教諭 芹 沢 志 保

キーワード：インドネシア語会話、英会話、現地交流、体験活動、国際理解教育

1. はじめに

本校では、年に25時間程度のインドネシア語会話、50時間程度の英会話の授業を行っており、どちらも外部講師による習熟度別クラスを編成している。一方、インドネシア語を使って現地の方と交流する機会は「交流校招待」「交流校訪問」「国際文化交流会（練習を3回程度含む）」の3回、英語を使って英語を話す外国の方と交流する機会は0である。この授業を“在外教育施設の特徴ある教育活動”と位置付けていながら、学習したことを活用する機会がない。「安全」で「持続可能」で児童生徒が「自分たちにもできた」と達成感が持て、授業での学びを深められる活動はないか。3年間、考え模索しながら実践してきたことをまとめた。

2. インドネシア語を生かしてインドネシアの人と触れ合おう…小2町探検「GO GO KETINTANG!」

(1) 準備

①顔見せ、地図作成（平成27年5月；報告者・現地スタッフ）

日本人学校から徒歩5分のクティンタン村に探検に出かけていたという古い資料を見つけた。本校勤務が長いスタッフにも確認し、同行してもらって様子を見に出かけた。報告者は“Selamat siang. (こんにちは)”しか知らなかったが、笑顔で元気にあいさつをし、村人に顔を覚えてもらった。また、同行していたスタッフに「近いうちに日本人学校の子もたちが学習に来る」旨を伝えてもらい、村人を驚かせないように配慮した。

②自分を知ってもらおう、地図仕上げ（平成27年5月～6月；報告者）

町探検は2回行う計画にした。うち1回は児童がインドネシア語を使う機会にするため、買い物をすることにした。顔見せの日から毎週土曜日には、報告者が一人で村へ出かけ、児童が買えそうなお菓子や文房具を売っているお店に入って店主に声をかけ、「この前の日本人がまた来た。何か言っていた」と覚えてもらえるようにした。また、何度も同じコースを歩くことで、地図を仕上げることができ、児童の事前学習の準備が整った。

③村の様子を事前学習（平成27年6月；小学部2年児童・報告者）

多くの企業で街歩きを禁止しているため、スラバヤに住む児童は、初めて自分の足で歩く体験をすることになる。見る物聞くことの全てが新しい情報では学習の視点がほやけるため、学習の目的をしっかり持たせるため、あらかじめどんな村なのかをパワーポイントで説明しておくことにした。その上で、もっと知りたいこと、確かめたいことなどを考えさせた。

(2) 本番

① 1回目（平成27年6月15日；小学部2年児童・報告者・現地スタッフ）

安全のため保護者数人にご協力いただき、通訳スタッフ、警備員とともに町探検へ。初めて歩く道路に「本当に穴だらけだ」「川にゴミがたまっている。これでは雨季に洪水になって当たり前」、自分から話しかけた知らない人があいさつを返してくれることへの感動、日本では見たことのない道



洗濯屋さんにあいさつ

路標識や看板・お店の発見、貧富の差による暮らし方の違いを知るなど、得るものが非常に大きく、同行していただいた保護者の方からも、この活動への賛同をいただくことができた。

② 2回目（平成27年6月29日；小学部2年児童・報告者・現地スタッフ）

お小遣い5千ルピア（邦貨43円）を持ち、2回目の探検へ。店の人と話しながらの1人での買い物は、多くの児童が初体験である。「〇〇をください」「いくらですか」「他の色（味）はありますか」「僕も同じのが欲しいです」「おつりをください」など、考えられる場面を想像して、いろいろな質問をインドネシア語で覚えた。答えも聞きとらなければいけないため、インドネシア語会話の授業に熱が入っただけでなく、自ら言い方を調べてくる児童もいた。無事に買い物ができたらお店の人と記念撮影。この写真にお礼のお手紙を添えるのが事後の学習の予定であった。

(3) 事後

- ①児童はお店の人に日本語でお礼のお手紙を書き、記念撮影した写真を貼ってカードを作成。報告者は児童が買い物をした複数の店主にインドネシア語でお礼をしたため、児童のカードとともに後日届けに行った。
- ②クティンタン村の地図に、自分たちで歩いて分かったこと、感じたことなど、車の中からは知り得なかった生の情報を一人ひとり書き込み、学習をまとめた。

(4) 成果○と課題●

- 27年度に行った活動であるが、28～29年度と、3年続けて他の教員と一緒に下見に行くと、「今年も来るのかい？」と楽しみにしてもらえている様子がかうかがえた。危険と隣り合わせであることは肝に銘じつつ、日本人の礼儀正しさや行動のスマートさは子どもの時から躰けられていることを知ってもらいながら、インドネシアが抱える問題（経済格差、インフラの未整備等）を児童が児童なりに目の当たりにできたことは、大きな成果と考える。
- 1回目の探検はラマダン中だったため、村の子どもたちから爆竹の手荒い歓迎を受けた。警備員や保護者に同行してもらって正解。宗教上の無用なトラブルは避けるよう随分と気を配ったつもりだったが、人々の実際の姿は、こうして人々の生活の中に入って初めて分かることも多く、安全については念には念を入れる必要があると痛感した。

3. 英語を生かしてインドネシアを訪れた人と触れ合おう…小5、6修学旅行「外国人100人に聞きました」

(1) 準備

小学部5、6年生は、28年度にバリ島へ修学旅行に行った。世界的にも有名な観光地バリ島は、本校のあるジャワ島とは宗教が違うため、風習、習慣、人の違いはもちろん、訪れる観光客の様子も全く異なる。そこで、2日目におよそ3時間の班別自主活動の時間を確保し、そこで班ごとに自分たちの課題を解決することにした。バリ島を訪れる観光客について調べたいという班に焦点を当てて紹介する。

①一人ひとりの課題を出し合う（平成28年6月）

「バリ島に行かなければ分からないこと」を一人ひとりが出し合い、班を編成する。どの国からバリ島を訪れ、バリ島をどう思ったか知りたいという児童を中心に、「外国人100人に聞きました（以下「100人に～」）」班は5人となった。

②事前学習（平成28年6月～8月）

事前に調べられること、バリ島で必ず調べることを精選。目的意識をしっかりと持った。また、バリ島で調べる方法や調べたことのまとめ方も見通しを持たせた。「100人に～」班は、出身国は道行く外国人にインタビューし、答えをシールで表に貼ってもらおうと計画。インタビューは英語とインドネシア語、日本語で対応、一番使うと予想した英語については、フリップも用意した。バリ島の印象など他の質問は、立ち止まってくれ

た人に聞き取りし、聞き取りの得意な児童がメモすることに。質問事項は英語で練習、予想される答えの英単語も頭に入れた。報告者は、答えてくれた外国人にもっと深く掘り下げて質問をし、学習のまとめに使える情報を収集できるように考えた。(例：バリ島に来て何をする予定か等)

(2) 本番（平成28年9月22日；「100人に～」班の小学部5、6年5人・報告者）

外国人が一番多く来ると予想される情報センターの広場前に場所を決め、フリップやシールなどを全部準備させた。背中に声をかけるのではなく目を合わせて声をかけるとよいとアドバイス。30分程で20人近くにインタビューができた。実は、児童は20人ぐらいでいいと思っていたのであるが、100人にするのを報告者が強く勧め、さらに1時間インタビューに挑んだ。フリップを掲げていたため、車やバイクに乗っている外国人も通りすがりに大声で答えてくれ、児童は大いに感動した。英語が通じないと感じた時はイン



インタビューの様子

ドネシア語や日本語に切り替え、臨機応変に対応。日本の小学校でALT（外国語指導助手）をしていたという外国人が立ち止まり、「こういう取り組みが日本には足りない。とても素晴らしいことに取り組んでいる」と大変褒めてくださった。また、深く掘り下げるための「バリ島で何をするのか」などの質問は報告者がしたが、答えは児童が真剣に聞き取り、「私の家族とは全然違う」など日本人の観光スタイルとの違いに気づくことができた。インタビュー終了間近には、逆に声をかけられたり、記念撮影を頼まれたりと、この活動を満喫している様子が見られた。

(3) 事後（平成28年9月から29年2月）

本校では、総合的な学習の時間（スラバヤタイム）で学習してきたことを、保護者や他学年児童生徒に発表する「スラバヤタイム報告会」を2月に実施している。それに向けて、「100人に～」班は壁新聞作り、寸劇の発表原稿作り、分かったことや感想の発表方法などについて話し合い、準備を進めた。参会した保護者からのアンケートには「100人に～」班の活動に賛同、感嘆の声をたくさんいただくことができた。

(4) 成果○と課題●

○英会話の授業では話すことに重点があるため、あまり文法を重視しない。それゆえ、英語が話せないのではなく、知らない人に話しかけられないところに児童の課題があった。児童がのちに「先生が『100人に聞く！』って言うからえ～って思ったけど、いい思い出になった」と振り返っていることから、学習内容を活用するという意味でも、もっと話せるようになりたいというモチベーションの向上の意味でも有効な活動だった。

●ウブドは、近年注目されるようになった日本人観光客にも人気の村で、児童の多くも家族で訪れている。つまり、児童はウブドの雰囲気や地理を知っていたということである。5人の班に教員が1名、人通りの多い場所に陣取ったとはいえ、交通事故やひったくりなどの危険は伴う。携帯電話で常に他の教員と連絡が取れるようにしておくほか、教員は、どこに何があり徒歩で何分かかるのか、などあらかじめ地理を把握する努力が必要。日本では、知らない人に声をかけることの危険性が言われている上、気軽に写真に応じてはいけない雰囲気もある。この活動は、むしろ日本で行う方が難しいかもしれない。

4. インドネシア語にどっぷりつかってみよう…小5、6国際文化交流会 劇「カンチルとカメ」

(1) 準備

本校では毎年10月下旬に現地校の児童生徒と一緒に劇や音楽を披露する学習発表会「国際文化交流会」が開催される。ここには来賓として、在スラバヤ領事館の総領事をはじめ、東ジャワ州文化観光局文化部長なども招待する。観客としては、本校保護者、出演する現地校の児童生徒の保護者、日本人会の会員の方など、体育館が

ぎっしり埋まる。本校はひと学年の人数が少ないため、連学年・部で発表を行う。小学部5、6年が平成28年度に行ったインドネシア語劇「カンチルとカメ」について紹介する。

①台本作成

報告者が2年目の夏の国費一時帰国にあたっていたため、あらかじめインドネシアで有名な子ども向けの昔話が日本語訳にされて販売されていることを調べ、帰国の際に手に入れた。また、インドネシアで同じ内容の本がないかを探し、購入。これで、同じ話を日本語とインドネシア語で読めることになった。インドネシアの昔話を選んだのは、児童生徒に、せっかく住んだインドネシアの話を知ってほしかったこと、現地校の児童がよく知っていて難しくなかったことからである。

夏休み中にまず日本語で台本を作成、次に全てのセリフをインドネシア語に訳していった。話し言葉で訳していく必要があることから、半分程度でギブアップし、通訳担当の事務スタッフにお願いすることになったのは申し訳ない。

②配役とセリフの練習

インドネシア滞在期間によってはもちろんのこと、語学が苦手な児童もいて、児童のインドネシア語習熟度はまちまちだが、すべての児童にセリフがわたるようにしておいた。役決め後、自分のインドネシア語のセリフを読んでみるが、授業では読む活動がほとんどないため、読めない。そこで児童は、学校にいる20人の現地スタッフに声をかけて、一人ひとりセリフの読み方を教わっていた。カタカナでメモするのだが、カタカナにできない発音も多く、何度も聞き直す姿が見られた。児童の中には、自分の家の運転手やメイドにも1対1で練習につき合ってもらったという者もいた。何度も声に出すうちに、分からなかった単語も何となく意味が分かるようになり、抑揚もついてきた。

③合同練習

現地校（UNESA）の児童4人も混ざっての合同練習が数回ある。現地校の先生も引率で来校するので、自分たちのセリフの言い方があっているか、ここでも確認に精を出す姿が見られた。現地校児童はここで初めて台本を手にするのだが、インドネシア語で書いてあるため、説明しなくても自分の役が把握できる。セリフは相手の物、舞台のどこに立つか、どちら側から登場するか、誰の後に言うかなどを本校の児童が簡単に教えた。

(2) 本番（平成28年10月29日）

日本人の観客の皆さんは「よく頑張った」と声をかけてくださった。現地の観客の皆さんは、例年ならスクリーンに映し出されたインドネシア語字幕を見て内容を把握していたものを、28年度は劇そのものを見て内容を把握でき、いつも以上に拍手をくださった。劇のエンディングに、体育科の表現運動「RUN」の演出があったため、動きのコミカルな劇、キレのある表現運動の対比が絶賛された。

(3) 事後

報告者は日本人学校通学経験者である。本帰国して困ったことは「何かしゃべってみて」に答えるのが難しいことだった。挨拶程度なら会話集にも書いてあり、かといって突然言われても何を話していいか分からない。帰国した児童も同じ場面に遭遇するだろう。そんなとき、この劇のセリフをさらっと言えたら、新しい生活に馴染むのもきっと早い。

(4) 成果○と課題●

○大きな行事でインドネシア語に取り組んだことで、その練習期間は一日中インドネシア語につかる生活だった。滞在期間が長くなると、日常会話の中に自然とインドネシア語の単語が出てくる児童生徒（職員も）が多いが、インドネシア語が飛び交う練習期間は、耳からも口からも目からもインドネシア語を感じることでできた貴重な時間だった。

- 今回は幸運にも、同じ話を日本語とインドネシア語で入手できたため教員でも何とかインドネシア語訳に手が出せた。通訳スタッフに支援を頼むことが前提になる場合は、取り組みが難しい。

5. おわりに

外国に住んだから外国語が話せるというのは誤解である。外国語が話せるかどうかは、外国語をどれだけ使ったかによるものだ。英語圏ではないのに、英語でコミュニケーションをとった児童の姿がそれを如実に表している。児童の話していた英語は文法としては間違いだらけだが、日本人が日本語を話しているときでさえ、正しい日本語かと言われればそうでもない。伝えたいこと、伝えなければならないことがあって、それを伝えようとしている態度が言葉になって出てくるのである。英語以外の外国語の場合、その国に住まわせていただいている者として、その国に敬意を表し、覚えていくものだ。その国の人と仲良くなりたい、一緒に〇〇がしたい、などの気持ちが言葉を覚える意欲につながる。

つまり、日本にいても英語を話せるようになる可能性は十分あると思うのだ。英語の授業が小学校に入ってくる。授業だけで話せるようにはならないかもしれないが、授業で学習した単語や文をツールにした体験学習を考えることで、話すことのハードルは低くなると感じる。

帰国したあと、私ができること。外国を知りたいと思うきっかけを作り、実際に英語を使ってコミュニケーションをとる活動を提案し、日本人としての誇りを持って外国を知り、広く世界に目を向けられる子どもたちを育てること。スケールの大きい話だが、足もとから一步一步と思う。